

一冊

Manyoh

佐藤利江元大使夫人をお迎えして ～多面的なアフリカの姿を学ぶ～

夏本番の7月度。1月から始まった第51期櫻華塾も7回目を迎えました。1年のうち半分が過ぎ折り返し地点です。今回は、2月度櫻華塾でお話しを頂いた佐藤啓太郎大使夫人である、佐藤利江夫人を講師にお迎えするというので、また違った角度からアフリカの姿を学ぶことを楽しみに、多くのメンバーが、7月17日に尾崎行雄記念財団の応接室に集まりました。

前座に、椎名節子さんから、学びの報告として、先月の講師であるINPS JAPAN 浅霧理事長がYouTubeにアップした「大島理森衆議院議長と語る会」の映像を見た感想を發表しました。

若手がたどたどしくも頑張ってお勉強し發表している姿に、大先輩の箱根芳子さんが応えてくださり、ロイヤル部を代表し「伴走者として次世代のヤングと共に走りつつ」と題し、それぞれの役割を果たそうと頑張っている若手にエールを送ってくださいました。会長をはじめ先輩方が温かく見守ってくださる中で活動できることは大変有り難いことだと改めて感じました。

また、新井明子さんから、国連の掲げる「持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals, SDGs)」に共感したレスリー・キーさんがミュージック・ビデオを制作、早見優さんが歌う『恋のブギウギトレイン』をテーマソングとして使用し、他にも広いジャンルから有志が集まり、初めての音楽と映像を通じたSDGs推進アクションが完成し7月15日にお披露目されたということが紹介されました。「持続可能な開発目標」は昨年9月に国連総会で採択され、2016年は実施元年です。「世界を変えるための17の目標、SDGs」を国連本部が策定し、分かりやすいアイコンとキャッチコピーもできていますので、私たちも国連の流れをよく理解して共に活動をしていきたいと思いますとの呼びかけがありました。

大槻会長から、8月に開催される第6回TICADアフリカ開発会議が、初めてケニアで開催されることについてお話があり、佐藤大使と一冊の会とのつながりと感謝を述べられた後、佐藤利江大使夫人にご登壇いただきました。夫人に聞きたい質問を先にお伝えし、答えていただきました。



【佐藤利江夫人と参加者とのやりとり】

質問1 アフリカ54カ国のうち何カ国に滞在しましたか？また、そのときの印象を教えてください。

アルジェリア、ザンビア、ジンバブエ、タンザニアに計約9年間暮らしました。当時のアルジェリアは独立して6年目くらいで治安もそれ程悪くなく、気候も大変良いところでした。20代で、生後5ヶ月の子供とバスやタクシーに乗って出歩き、市場等で買い物をして過ごす生活でした。発展途上国での生活は、使用人を雇わなければならないため、使用人とのコミュニケーションには生活習慣の違いもあり、苦勞もありましたが、助けられることも多くありました。アルジェリアはフランス、ジンバブエはイギリスから最後に独立した国であり印象が深いです。大槻会長とは、タンザニアでお会いした時からのお付き合いで長くお付き合いをしております。

質問2 2030年に向けて世界が合意した、国連が定めた持続可能な開発目標の中に「安全な水とトイレ」の項目がありますが、このことについて当時アフリカで感じたことを教えてください。

アフリカ大陸は日本と異なり硬水で、飲み水は購入しておりました。ジンバブエでは、使用人が「自分の実家

にはダムがある」と言うので、遊びに来ていた私の両親と彼の実家に行ってきました。すると、家具や物はほとんどなく、インフラもないので火種は貴重で絶やさないう心配りをした生活をしていました。当時独立したばかりで、本当にモノがない状態で、雨が降ったら川が自然にでき橋もないので水の中を渡るしかない。使用人が「ダム」と言っていたものは、濁った水たまりでした。水は衛生状態が良くないため、煮沸して使用するよう勧めたものの、薪がない。家の垣根を壊して燃料にして利用しているくらいでした。石油コンロを援助し、水を煮沸して使わせるようにしました。

最後に赴任したタンザニアでは、水道はありましたが完全に濾過されている水ではありませんでした。そこで使用人には瓶に一定期間水を貯め、泥を沈殿させ、煮沸してから飲むように勧めました。そうしたところ、その家の子どもは他の田舎地域で水を飲むと下痢をするようになってしまったと言っていました。

それほど現地の水は衛生状態がよくない訳ですが、日本の海外援助の話で、初めに水質検査を行ったところ、日本の安全基準をあまりにも上回る水準で、日本の基準値にするには非常に費用がかかることが分かり、日本は援助できなかったことがありました。援助ではそういう点が難しいところです。

トイレの話ですが、幹線道路沿いにもトイレはありません。日本が援助して道路建設を請け負った時、工事中に使用したトイレを残したことが喜ばれました。現地の方は、バス等で移動中、用を足したい時は「薬草を採りに行きたい」と言って車を止めてもらうそうです。

地方のゲストハウスでもトイレはありますが、便座がないので困りました。そのため、いつも洗面器と段ボールを持参していました。段ボールは便座の代わりです。本当に日本では想像もつかないような経験ばかりでした。

※タンザニアに、2000年にさくら幼稚園を寄贈しております。ちなみにトイレは「水洗」です。

質問3 他にもご苦労や、ご活躍をされていると思います。ぜひ教えてください。

地方に行った折、ヤギをお土産に頂いたことがあり、とても困ってしまいました。使用人に相談したら、「イスラム教の儀式に則って殺して食べましょう」と提言されましたが「それはちょっと…」と考え、ヤギを売り、ニワトリを買って帰り使用人に渡しました。

またあるときは、ホロホロドリを頂き困ってしまい、これも売り使用人が推薦するニワトリを買いました。ヤギ等をもらったときは、謝意を伝えて、現地の人で食べてくださいと言えば、もらわなくて済むと知ってからは、そのようにいたしました。

質問4 アフリカ大陸という生活文化が違う人たちと交流するにあたり、心がけていたこととは何でしょうか。また、そのような肌の色が違う人と共に過ごす環境で育ったお子様はどのような感想を持たれていますか？

人種の違いを感じたかどうかと言うと、あまり感じなかったです。子どもたちは現地の学校に小さいときから入っていたため、すんなりと打ち解けていました。学校も人種が混ざった中だったので、いろんな肌の色が交わるのは気にならなかったようです。

息子がアメリカの南部、アトランタに行ったときも人種差別を感じずに過ごし、社会人になってから「いろいろな人種の中での経験が非常に良かった」と言っており、親としてとてもほっとしました。座右の銘として「運命に感謝する」という言葉があります、そのとおりにして良かったと思っております。

今回、アフリカという風土や文化が全く異なる中での生活体験を、女性であり、母であるという視点からお聞きすることができたことは大変貴重なことでした。多面的なアフリカの姿が垣間見え、実体験に基づくお話は聴衆を魅了した一時でした。

男性の感想も聞いてみました。「挑戦の大切さ、飛び込んで行く強さを学びました」とのことでした。私は、ヤギや鳥をもらったらどうしよう、子どもの学校の事を考えると帰国した方がよいのだろうか、などと「自分だったらどうするだろう？」と考えながら聞いており、柔らかい口調で苦労を苦労でないかのように語る夫人の中に、日本国の大使夫人としての使命を凜として誇りに燃えつつ、粛々と生活を続けていくという、日本女性らしい強さを感じました。講演は、大拍手で終了しました。



文責：大槻、小山、赤田 協力：山内